



リズムから生み出される英語の力

赤峰 準（神奈川県横浜市立松本中学校）

はじめに

人には持って生まれたリズムがある。黒人社会からジャズが生まれ、そしてソウルミュージックが生まれた。彼らのリズム感の鋭さには舌を巻く。軽快な音楽が流れ出すとその身体は自然と踊り出す。環境だけがその要因とは言い難い。持って生まれた素質としか言いようがない。ならば、日本人はどうだろう。民謡が流れると合の手を入れたいくなる。演歌が流れると鼻歌が出る。

個人レベルでもリズム感は異なる。ラジオ体操をしてみると身体の動かし方に歴然とした違いがあり、歌の好みにも違いがある。それぞれの人間に個性があるように、それぞれの人間には、独自のリズム感というものがあるはずだ。

英語を学習する上でもリズムを考えないわけにはいかないだろう。単語や文を発音するときに漫然と発音するのではなく、リズムを刻むように発音する Rhythm Chants という指導法がある。この指導法の長所は、生徒自身も楽しく発音でき、アクセントにも気を遣い、より英語らしく発音できるようになるということではないだろうか。

リズムによる言語開発能力の差異

生徒たちに Native Speaker や CD、テープの発音を聞いて真似をさせると、おもしろい結果が得られる。"I take a bath." を聞き取らせてみよう。それぞれの単語を周知している生徒は "I take a bath." と復誦するだろう。しかし、それぞれの単語が未知である生徒にはどう聞こえるのだろうか。かつて私は CD に録音された Native Speaker の発音を、CD デッキから流し、生徒をそのそばに座らせた。私の

生徒には次のように復誦したものがいた。「アイ チャック パー」、冗談でそう言ったのではない。真剣にそう聞こえたのだ。確かにその生徒の学力は高くない。しかし、耳は良かったのだ。何度やっても生徒は「アイ チャック パー」と発音する。不思議に思った私はじっくりと CD の発音に耳を傾け、はっとした。その生徒は CD から聞こえてくる雑音まで聞き取っていたのだ。その雑音と 'take' が混ざり「チャック」となってしまったのだ。

しかし 'take' は二重母音であるが、「チャック」だと単母音になってしまう。ここでの問題は耳の良さではない。まさにリズム感なのである。英文の持つリズムを正確に聞き取っていれば、その生徒はもう少し違った表現をしていたのではないだろうか。すなわち、リズム感の違いは言語を認識する能力の違いと相通ずるものがあるということである。

ある日の授業

私の1年生での、ある1時間の授業をここで紹介したい。リズムを重視した内容のものなので、参考になれば幸いである。（次ページ授業案参照）

まず、あいさつを全員とした後で一人ひとりと会話をする。あいさつであったり、復習的内容であったりと様々である。そのときに応じて質問の内容は異なるので、生徒は答えを準備できない。そうなる、生徒には答えられないのではないかとこの心配もあるが、実際はそうでもない。毎回質問する時間を設けると、生徒には心構えができるものである。一定のリズムで教室を回り、同じリズムで質問し、同じリズムで次の生徒へと移ってゆく。このとき答えられない生徒がいたならば、答えが出るまで待つのではなく、次の生徒に同じ質問をするほうが効果

Time	Contents	JTE	Students	Note
3 ^{min}	Greeting	Good morning, everyone. How are you?	Good morning, Mr Akamine. I'm great.	全体のあいさつの後、個別に問答。
5	Small Talk	Is this your book? Is this my pencil? 毎時間、必ずSmall Talkを行なうことで、英語嫌いをなくし、関心を持たせる。	Yes, it is. Yes, it is.	'Yes'と答えるべき時と、'No'と答えるべき時を間違えたら、教師はその品物を買って貰う真似をする。
5	Alphabet	ペンマンシップでのページを指示。 前時の宿題の確認。	ペンマンシップで練習。	(評価 意欲) 前時の宿題について A; 丁寧にまとめてある。 B; きちんと書いてある。 C; やっていない部分がある。
12	Review	前回の内容を口頭試問にて確認。 プリントに丁寧に書きまとめさせる。	JTEの質問に的確に答える。 プリントに丁寧にまとめる。	(評価 理解) A; 100%理解した。 B; ほとんど理解した。 C; 分かっていない。
5	Read Textbook	Open your textbooks to page 16. Please listen to me. Everyone, stand up, please. Let's have the pronunciation with rhythm. Please repeat after me.	Listening. Pronunciation. 全員を立たせ、教科書を持たせる。	教師が発音を示し、状況の説明を簡略に行なう。 pp.16-17の発音をRhythm Chantsで行なう。
18	Activity-Speaking	Excuse me. Thank you. Pattern Practiceで一人ひとりを確認。 Speakingで一人ずつ前に出て発表させる。	Yes? You're welcome. Pattern Practice 発表者は一人の生徒を指名し補助してもらう。	(評価 表現) = 発表者 A; 積極的に発話する。 B; かなり発話する。 C; うまく発話できない。 (評価 理解) = 補助者 A; 反応がすばらしい。 B; 適した反応をする。 C; うまく反応できない。
2	Greeting	ワークを配布しp.15までを宿題に That's all for today. Good-bye, everyone.	Good-bye, Mr Akamine.	次を期待するようなあいさつを。

的だと考える。質問に答えられなかった生徒にとって級友が同じ質問にどのように答えたかが大いに参考になり、理解を深められる。そうすれば次の機会には答えられるようになるものである。

この授業は1年生の初期段階の内容なのでアルファベットを練習する時間を設けている。より授業が進めばこの時間にターゲットの文法を押さえることもできる。ここでは生徒のペースに任せる時間とする。つまり一呼吸いれる時間ともなる。

続いて行われるのは、Rhythm Chantsである。ここでもリズムに乗って発音練習することを重視している。リズムに乗って発音するのは教科書本文ではなく、新出単語と基本文に限ったほうがやり易い。詳しくは「Reading能力を高めるために」のところで述べたい。

アクティビティーに関しては、生徒を楽しませるための内容は避けたい。ターゲット項目を定着させるためであり、生徒に英語で表現させる時間であり、また生徒に英語を理解させる時間でもある。このことを十分頭にいれて活動させたい。

最後に、「もう終わりなの?」と感じさせるような授業であれば、元気にあいさつしてくれるだろう。そして、次の授業への期待感を持たせたい。だからこそ、次回に期待を抱かせるようなあいさつを教師は心がけたい。

Speaking能力を高めるために

授業案の初めのGreetingからSmall Talkにかけて、以下のように展開したい。授業の初めにはどの

先生もあいさつを欠かさないと思う。 "Good morning, everyone." と問えば、生徒たちからは "Good morning, Mr Akamine." と返ってくる。ここまではいいのだが、問題はこのあとの場面である。 "How are you?" と聞けば、 "I'm fine, thank you. And you?" と、一斉に返ってくるのはおかしくないだろうか。生徒の中には 'fine' という人もいれば、 'so-so' の人もいるだろうし、 'too bad' だっているはずだ。それをひとくくりで尋ねてしまっただけでは効果的と言えない。できるならば一人ずつ尋ねて回りたい。 "How are you?" と聞いて、 "I'm so-so." と答えたら、 "What's the matter?" と畳み掛ける。 "I'm good." なら、 "Why are you good?" と聞いてみる。さらには、復習を兼ねていると質問をする。例えば1年生の1学期ならば次のように。

T: Good morning.

S: Good morning.

T: How are you?

S: I'm tired, thank you. And you?

T: I'm good, thank you. But why are you so tired?

S: I have P.E. (本当はhadと言いたい)

T: Do you like baseball?

S: Yes, I do.

T: Do you play baseball?

S: Yes, I do.

T: Do you play baseball every day?

S: No, I don't.

これは一般動詞を導入したときの内容である。さらに次の質問もしてみる。

T: Is this your pencil-case?

S: Yes, it is.

be動詞を織り交ぜると混乱するかもしれないが、回数を重ねることで慣れてくる。少人数のクラスなら全員と会話するのに5分から10分程度で済むようなリズムで回りたい。また、同じ質問ばかりすると、生徒も答えを準備してしまうので、質問の切り口を変化させたほうがよい。

Activityの場面で私がここ数年来実践していることだが、1年生にはしばらく自己紹介を通じて書く活動と話す活動を続けさせている。まずは名前、出

身程度で紹介。次に好きなスポーツや教科などの紹介。さらには、有名人になりきって自己紹介をする。自己紹介を situation を変えて、たびたび行うことで発表に慣れさせたいと考えている。発表者以外の生徒には必ずメモを取りながら聞くように指導している。他の生徒の発表した内容を教師から質問されてもメモを活用して答えられるようにする。ときには発表者に対して質問などをさせ、発表された内容をしっかり理解するように促す。

T: What's his name?

S: His name is Taro.

T: Is he from Yokohama?

S: No. He is from Kamakura.

ここまでの流れをテンポよく、全体のリズムを意識して展開したい。自己紹介が終了したらすぐに質問し、紹介の内容を確認する。生徒の記憶がはっきりと残っているうちに質問を繰り返せば、生徒もそれほど苦しまずに発話できると思う。

Listening能力を高めるために

教師が生徒の一人と Dictation を行なっている間、他の生徒がボーッとされていてよいわけではない。生徒の中にはなかなか会話にまでこぎつけない者もいる。生徒が上手に答えられない場合は周囲の生徒に手伝ってもらえることができる。例えば、

T : Do you play baseball?

S1: ...

T : Does he play baseball?

S2: Yes, he does.

T : Do you play baseball?

S2: Yes, I do.

T : Now your turn. Do you play baseball?

S1: Yes, I do.

生徒が何をどう言うべきなのかわからなくても、周囲の生徒の言い方に頼ればそこにヒントがある。そういった周囲の力を信じて、利用させてもらう。しかし、教師として気をつけたいのは、Slow Learnerを追い込まないことである。追い込むことでなおさら口を閉ざしてしまうこともあり得るから

だ。ここでも生徒のリズムを引き出すようにテンポよく展開したい。

Reading能力を高めるために

教科書の本文を読ませようとする際に、いつも悩まされることがある。それは「声が小さい」「ただらだと読んでしまう」ということだ。そこで、私は次のようなことを授業で実践している。まずは8ビートのリズムを録音してあるテープを流す。次に生徒が発音だけに集中するように起立させる。その際、教科書を必ず手に持たせる。教科書を持つのは、背中を丸めずに声を前に出すためである。ただ発音させるのではなく、いかに発音させるかが大事である。せっかくの発音練習なのだから、しっかりと発音してもらいたい。下を向かず、大きな口で発音してもらうために考えた指導である。今ではリズムが流れると指示をしなくても生徒も立ち上がるようになってきている。

リズムに乗って1単語3回くらいずつ練習する。教師が恥ずかしがったら元も子もない。元気よく楽しく練習する。さらに基本文もリズムに合わせて発音させる。イントネーションや区切る場所に気をつけて。ときには教師がお尻を振って見せてもいいだろう。

次に本文を発音させるが、本文は少々長くなるので、リズムにはなかなか乗せられない。そこでクラスを二分して向き合わせる。大きな声で競争させるように本文を3回ほど読ませる。教師も負けずに大声で邪魔をしてみよう。負けまいと生徒は大声になる。読み終えた後、誰の声が最も大きかったかを確認すると生徒も盛り上がりを見せるようになる。また、大声を出せば他クラスにも聞こえるので、良い影響が現れるであろう。あのクラスには負けたくないという雰囲気が出れば好都合である。ただし、他教科の教師の理解を事前に求

めておくことが肝要である。

さて、ここで一人ずつ読ませてみよう。どうだろう、どの生徒も教室中に聞こえる声で読んでいるのではない。しかもかなりリズムカルでもある。

まとめ

リズムは英語という教科にだけある考え方ではない。どの教科にも必要な要素の一つである。生徒に考えさせずに、かつ考えさせる適度な時間。これがリズムを生み出す。一人がつかずいても周囲の力で蘇えるリズム。テンポよく繰り出される英語から出てくるリズム。これらのリズムから生み出される英語の力はどの生徒にも備えることができると思う。

今私が受け持っている生徒の中に、重度難聴の生徒がいる。彼女には女性教諭の声ならある程度は聞こえるが、男である私の声は残念ながら届かない。しかし、彼女はとても積極的である。読唇で相手の話を理解し、コミュニケーションを取ろうとする。英語でも同じ努力をしている。しかし、日本語ではない外国語を読唇で理解するのは大変な労力である。そこで、私はいつにも増して身体を大きく使って彼女の前でリズムを刻むことにした。口は大きく開き、リズムカルに英語を伝える。彼女も同じように反応してくれた。他の生徒となんら変わらずに。

本校のALTにListeningの練習のため、彼女に直接話しかけてもらった。ALTは彼女の状況を熟知していた。だからこそゆっくりと、一語一語かみ締めるように発音してくれた。その結果、彼女はALTが発音した英語をほとんど理解できなかったのである。つまり、リズムを崩したものは日本語であれ、英語であれ、彼女には届かないのである。その証拠に、アクティビティーの説明をするALTの言葉はしっかりと届いているのである。

リズムを重視した英語指導は必ず生徒に深い理解を提供できると私は信じている。